



Title	自由党の分裂と労働党：1918年総選挙二人区の戦況
Author(s)	岡田，新
Citation	大阪大学英米研究. 2018, 42, p. 73-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99420
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自由党の分裂と労働党

－1918 年総選挙二人区の戦況－

岡田 新

1

第一次大戦前、二人区は、労働党と自由党の緊密な同盟関係を如実に表すエドワーディアン・ポリティックスの舞台であった。1906 年から 1910 年の総選挙で、二票制の下にあった二人区では、労働党、自由党の候補に投票した有権者の内、しばしば 9 割以上に及ぶ人々が労働党と自由党の候補をペアにして票を投じていた¹。しかしロイド・ジョージ (Lloyd George) 率いる連立政権派と、連立政権に距離を置くアスキス (H. H. Asquith) 派に自由党が分裂した 1918 年総選挙では、様相は一変した。連立派の党派は一体となって選挙戦を闘い、圧勝した。これに対して、アスキス率いる非連立派の自由党は、12 の二人区に 4 人しか候補を立てられなかった。一方大多数が非連立派に与した労働党は、二人区すべてに候補を擁立。その結果、非連立派自由党は、二人区で辛うじて 1 議席を得ただけだったのに対し、労働党は 4 議席を獲得した。得票率でも、非連立派自由党の二人区での得票率は 10.4 % に過ぎなかった。これに対し労働党の得票率は、その倍を越す 23.2 % に達した。非連立派自由党はアスキス元首相自らも落選の憂き目にあい、一人区で惨敗を喫したが、二人区では文字通り存亡の危機に直面した。労働党は、これに代わって連立派与党の圧勝に抗する野党のメインプレーヤーに躍り出たのである²。

だが労働党の前には、厚い壁が立ちはだかっていた。労働党は、初めて全

国の選挙区に候補者を擁立した。このため、労働党が得た得票自体は、飛躍的な伸びをみせた。だが議席の上では、一人区二人区を合わせても、連立派与党の圧勝の前に、1910年12月総選挙と比べて、労働党はせいぜい15議席を増やしたに過ぎなかった。しかも労働党が前進する主因となった自由党の分裂は、一時的な現象に終わる可能性があった。実際労働党は1924年に最初の少数派政権を樹立するものの、1923年の総選挙では、労働党と自由党の議席差は33議席にとどまった。1924年総選挙では自由党は分裂を克服、自由党と労働党の鏖戦はなお続いた。このような状況を念頭に置くと、1918年総選挙における労働党の前進は、果たして時代を画する躍進と言えるかどうか、歴史家の間でも見解が分かれている³。

しかし選挙史の観点からみれば、議席数だけが問題ではない。労働党の前進は、選挙区の草の根のレベルでどれほど強固な地歩を持つものであったか、その得票の構造が問題となる。とりわけエドワードリアン・ポリティックスにおける自由党と労働党の同盟関係の主な舞台であった二人区で、政党の支持基盤はどのように変貌し、どのような人々の支持が労働党の前進に貢献したのか。選挙の歴史という観点からみれば、こうした点が重要な考察の対象になる。

前稿で明らかにしたように、労働党が議席を獲得した4つの二人区の内、プレストン（Preston）では、非連立派自由党の候補と労働党の候補がペアを組んで連立派候補に勝利をおさめた。ダンディー（Dundee）では、連立派自由党候補と労働党の候補がペアとなって闘い労働党は議席を制した。ダービー（Derby）でも、労働党は非連立派自由党との組み票を頼りに勝利をもぎ取った。一方連立派候補と労働党候補が直接対峙したブライトン（Brighton）、ブラックバーン（Blackburn）では、労働党は、本来の支持層以外に支持を広げることができずに敗北した。こうした結果からみると、1918年総選挙における労働党の二人区での前進は、エドワード時代に培われた自由党との同盟の遺産を継承したことによるものであったように思われる⁴。

とはいえ、非連立派自由党と労働党候補が組んだプレストンと、連立派自

由党候補と労働党候補が票を分かちあったダンディーの例が示すように、分裂した自由党の支持者と労働党との関係は単純ではなかった。本稿では、労働党が獲得した4つの二人区－プレストン、ダンディー、ダービー、そして無投票だったボルトン（Bolton）に視線を集め、1918年総選挙の結果を、20世紀初頭の他の総選挙結果と比較し、前稿での考察を補いたいと思う⁵。

2

第一次大戦前のプレストン選挙区では、1906年、1910年1月、1910年12月総選挙で、労働党と自由党の候補が一人ずつ立候補し、保守党（統一党）の候補と対決する構図が続いていた。1906年選挙、1910年1月および12月総選挙については、残念ながらプレストンにおける二票制度の下での票の行方についての記録は残っていない。だが各選挙における党派別の得票をみると、保守党2候補は数百票差で同じような水準の票を獲得しており、保守党候補同士が組み票（split）の形で票を分け合っていたことが推定できる。他方、1910年1月総選挙で諸派候補が介入した場合をのぞいて、保守党候補と対決していた労働党と自由党の候補も、お互いにはほぼ同じ水準の得票を得

表1 プレストン選挙区の党派別得票数
1900年－1910年12月総選挙

年	保守党	保守党	自由党	労働党	その他
1900	8944 (41.0)	7622 (35.7)		4834 (22.1)	
1906	7303 (22.2)	6856 (20.9)	8538 (26.0)	10181 (30.9)	
1910.01	95268 (27.1)	9160 (26.0)	7539 (21.4)	6281 (17.8)	27048 (7.7)
1910.12	9184 (26.8)	8993 (26.3)	8193 (23.9)	7855 (23.0)	

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を％で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

ていた。このことからみて、労働党と自由党の候補も、8 割から 9 割の票を、組み票として分け合っていたのではないかと推測される。二票制の行方についての記録を欠いているため、推測に留まるが、プレストンでも他の二人区と同じく、1910 年 12 月総選挙までは、労働党と自由党の支持層は、大部分は二票制の下で票を分け合っていた、と考えることが妥当であろう。

では 1918 年総選挙ではどのような変化がみられたのか。1918 年総選挙ではプレストン選挙区では、スタンレー (Stanley) とブルックス (Brookes) という 2 人の連立派保守党候補に対して、労働党のショウ (Shaw) と非連立派自由党の候補オニール (O'Neil) が議席に挑んだ。4 人はいずれも新人候補であったが、表 2 から判明するように、連立派保守党 2 候補—スタンレーとブルックス—の組み票は、それぞれの獲得した票数の 9 割を越している。これに対抗した連立派自由党候補オニールと労働党の候補ショウの組み票の割合も、労働党ショウの場合は 79.7%、非連立派自由党オニールの場合

表 2 1918 年総選挙プレストン選挙区における二票制の分析

	単独	連立派との組み票		労働党との組み票	自由党との組み票	計
		連立派保守党	連立派保守党			
連立派保守党	518 (2.7)		17277 (91.1)	626 (3.3)	549 (2.9)	18970 (100)
連立派保守党	127 (0.7)	17277 (96.4)		237 (1.3)	287 (1.6)	17928 (100)
労働党	2993 (15.6)	626 (3.3)	237 (1.2)		15357 (79.7)	19213 (100)
自由党	2292 (12.4)	549 (3.0)	287 (1.6)	15357 (83.3)		18435 (100)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

には 83.3% に達していた。つまりプレストンにおいては、1918 年総選挙でも、連立与党の保守陣営は依然として一枚岩の結束を見せていたが、これに對抗する労働党と非連立派自由党の支持層もそれに劣らず強く結束していた。労働党と非連立派自由党の支持者は、それ以前の総選挙における労働党と自由党の同盟関係を継承していたことが分かる。

では時代を下って、1922 年の総選挙ではどうだったか。幸い 1922 年総選挙については、プレストンの 2 票制の票の行方の記録が残っている。1922 年総選挙でも、保守党 2 候補と自由党・労働党 2 候補の対決という構図は変わらなかった。表 3 から分かるようにこの総選挙で労働党が得た得票の内、自由党候補との組み票の割合をみると、81.3% に達している。一方自由党候補の得票の内、労働党候補との組み票も、86.2% に及んでいる。つまりプレストンでは、1922 年の時点でも、エドワード時代以来の自由党と労働党の支持者の緊密な同盟関係が引き続き維持されていた。

表 3 1922 年総選挙プレストン選挙区における二票制の分析

	単独	保守党との組み票		労働党との組み票	自由党との組み票	計
		保守党 I	保守党 2			
保守党 I	1708 (7.6)		19028 (84.3)	1055 (4.7)	783 (3.5)	22574 (100)
保守党 2	445 (2.2)	19028 (93.2)		447 (2.2)	490 (2.4)	20410 (100)
労働党	3388 (12.9)	1055 (4.0)	447 (1.7)		21369 (81.4)	26259 (100)
自由党	2156 (8.7)	783 (3.2)	490 (2.0)	21369 (86.2)		24798 (100)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 保守党 I は Stanley、保守党 II は Camm 候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。

ただし 1924 年総選挙以降は、1929 年総選挙まで、労働党候補一人と自由党候補が一人ずつ立候補して保守党と対決する構図が続くものの、2 票制の票の行方をみると、労働党と自由党の支持者の同盟関係は、次第に結束を弱めてゆく。1924 年には労働党の当選者の得票における自由党との組み票の割合はなお 85.6% あったが、1929 年総選挙では 65.4% に低下。1931 年総選挙では、自由党は立候補を見送った。労働党の候補も、1931 年、1935 年には保守党に惨敗し、プレストンで労働党が議席を回復するのは 1945 年のことである。

3

次に 1918 年総選挙で連立派の自由党候補に 2 人の労働党候補が挑む変則的な対決構図となったダンディー選挙区をみてみよう。この選挙区は、1908 年の補欠選挙以来、自由党ウィンストン・チャーチル (Winston Churchill) の選挙区であった。ダンディーでは、1900 年総選挙は、自由党 2 候補と保守党および自由統一党の候補との対決で闘われた。1906 年総選挙ではこれに労働党の候補が参戦、1910 年 1 月、12 月には自由党の候補が一人減って、代わりに諸派の候補が一人加わる構図となった。各総選挙の党派別得票数と 1906 年総選挙以後の労働党と自由党との組み票の数を表出したのが表 4 である。1906 年に労働党候補が参戦した時には、労働党の得票 6833 票の内、3183 票 (46.6%) が自由党との組み票であった。ところが 1910 年 1 月には労働党の得票 10365 票の内自由党との組み票は 9233 票 (89.1%) にまで上昇、1910 年 12 月にも、労働党が獲得した 8957 票の内 8019 票 (89.5%) が自由党との組み票であった。つまり自由党が候補を一人に絞った 1906 年以降、特に 1910 年 1 月、12 月総選挙では、自由党と労働党の候補は、緊密なタッグを組んで保守党候補と対峙し、成功裡に議席を分け合ってきたのである。

1918 年総選挙では、ダンディーでは、保守党は立候補せず、現職の連立

表 4 ダンディー選挙区の党派別得票数
1900 年—1910 年 12 月総選挙

	保守党	自由統一 党	自由党 I	自由党 II	労働党	その他	自由/労働 組み票
1900	5181	5152	7777	7650			
1906	3183	3865	9276		6833		3183
1910.01	4552	4339	10747		10365	1512	9233
1910.12	4914	5685	9240		8957	1825	8019

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 1900 年総選挙の自由党 I は Robertson、自由党 II は Leng 候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。
5. 自由/労働組み票は、自由党候補と労働党候補に投じられた組み票の数を表す。

派自由党のチャーチルと労働党のウイルキー (Wilkie) に加え、諸派 (スコットランド禁酒党) のスクリムジャー (Scymgeour)、そして新たに労働党からブラウン (Brown) が立候補した。1918 年総選挙の結果をみると、連立派自由党候補チャーチルに投じられた票の内、労働党候補ウイルキーとの組み票は 80.5% を占めている。一方労働党ウイルキー候補に投じられた票の内、83.6% が連立派自由党のチャーチルとの組み票であった。この選挙区の場合、ウイルキーは 1906 年から労働党の議員をしており、先に見た 1910 年 1 月、12 月の総選挙では、自由党のチャーチルとウイルキーがペアを組んでいた。1918 年の選挙結果は、チャーチルとウイルキーの支持者の固い結束が、1910 年 1 月、12 月と同じく、1918 年選挙でも機能していたことを示している⁶。

では 1922 年総選挙ではどうなったか。1922 年にはチャーチルは、ロイド・ジョージ率いる連立派自由党の議員が組織した国民自由党 (National Liberal) から立候補 (表 6 の国民自由党 I) し、もう一人マクドナルド (Macdonald) が国民自由党から立候補した (表 6 の国民自由党 II)。これに対し

表 5 1918 年総選挙ダンディー選挙区における二票制の分析

	単独	連立派自由党 との組み票	労働党 I との組み票	労働党 II との組み票	諸派 との組み票	計
連立派 自由党	3480 (13.5)		20752 (80.5)	601 (2.3)	955 (3.7)	25788 (100)
労働党 I	1226 (4.9)	20752 (83.6)		1885 (7.6)	959 (3.9)	24822 (100)
労働党 II	658 (8.5)	601 (7.7)	1885 (24.3)		4625 (59.5)	7769 (100)
諸派 (SPP)	3884 (37.3)	955 (9.2)	959 (9.2)	4625 (44.4)		10423 (100)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 労働党 I は Wilkie、労働党 II は Brown を示す。連立派自由党の候補は Winston Churchill、諸派 SPP はスコットランド禁酒党 Scottish Prohibition Party の Scymgeour。
3. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
4. 網掛けは当選者を示す。

て労働党は、モレル (Morel) を擁立、アスキス派の自由党もピルキンソン (Pilkington) をたて、さらに諸派スコットランド禁酒党が3度目の挑戦になるスクリムジャーを、さらに共産党がギャラハー (Gallacher) を立てた。

この混戦の中、チャーチルは落選の憂き目を見る。表 5 に示した 2 票制の票の行方をみると、連立派自由党のチャーチルは、1918 年総選挙まで見事に保っていた労働党との組み票をほとんど得ることができず (2.7%)、アスキス派の自由党との組み票も無きに等しかった (3.9%)。これに対して労働党の候補モレルは、諸派スコットランド禁酒党のスクリムジャーと票を分けあい (71.4%)、スクリムジャーがトップ当選を果たし、自由党との組み票はネグリジブルであった (5.4%) にもかかわらず、労働党候補が二人目として当選するという番狂わせとなった。諸派スクリムジャーはこの後も、1923 年、1924 年、1929 年の総選挙を勝ち抜き、1931 年に落選する。1918

表 6 1922 年総選挙ダンディー選挙区における二票制の分析

	単独	国民自由 党 1 との 組み票	国民自由 党 2 との 組み票	自由党と の組み票	労働党と の組み票	諸派との 組み票	共産党と の組み票	計
国民 自由党 I	587 (2.9)		16798 (82.1)	798 (3.9)	552 (2.7)	1661 (8.1)	70 (0.3)	20466 (100)
国民 自由党 2	252 (1.2)	167998 (83.0)		23315 (11.4)	658 (3.3)	2092 (10.3)	129 (0.6)	20244 (100)
自由党	381 (5.7)	798 (11.9)	2315 (34.7)		1630 (24.4)	1490 (22.3)	67 (1.0)	6681 (100)
労働党	1018 (3.4)	552 (1.8)	658 (2.2)	1630 (5.4)		21621 (71.4)	4813 (15.9)	30292 (100)
諸派 (SPP)	5015 (15.4)	1661 (5.1)	2092 (6.4)	1490 (4.6)	21621 (66.4)		699 (2.1)	32578 (100)
共産党	128 (2.2)	70 (1.2)	129 (2.2)	67 (1.1)	4813 (81.5)	699 (11.8)		5906 (100)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 国民自由党 I は Winston Churchill, 国民自由党 II は Macdonald, 諸派 SPP はスコットランド禁酒党 Scottish Prohibition Party の Scymgeour 候補を指す。
3. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
4. 網掛けは当選者を示す。

年総選挙まではエドワード時代に築かれた労働党支持者との同盟を維持し議席を確保していた連立派自由党のチャーチルは、1922 年総選挙では、労働党支持者から完全に見放されてしまったと言わねばならない。しかし労働党候補モレルに票を投じた有権者は、国民自由党の候補にも、自由党候補ブルキントンにも、わずかしき組み票を投じていない。国民自由党のチャーチル、マクドナルド候補と自由党候補ブルキントンは、いずれも労働党の支持者から票を得られず共倒れとなったのであった。

次に 1918 年総選挙で連立与党が候補を立てず、非連立派の保守党、非連立派の自由党、労働党、諸派（国民民主労働党 National Democratic and Labour Party-NDL）の候補の争いとなったダービー選挙区を見てみよう。ダービーでは 1900 年総選挙から、自由党候補と労働党候補のペアによる議席の獲得が続いていた。表 7 に掲出したように、1900 年総選挙でも、自由党候補の票の内労働党との組み票の割合はすでに 87.9% を占め、労働党の獲得した票の内の自由党との組み票の割合も、91.1% に達していた。両党の支持者の結束は、以後さらに強まり、1906 年には、自由党候補の票の内、労働党との組み票は 96.3%、労働党の票の内の自由党との組み票の割合は、95.1% に及んでいる。1910 年 1 月総選挙でも、自由党票の 95.1%、労働党票の 96.7% はお互いの組み票が占め、1910 年 12 月総選挙では、自由党票の 91.2

表 7 ダービー選挙区の党派別得票数
1900 年－1910 年 12 月総選挙

年	保守党 I	保守党 II	自由党	労働党	自由／労働
1900	7397	6775	7922	7640	6961
1906	6421	6409	10239	10361	9857
1910. 01	8038	7953	10343	10189	9919
1910. 12	7720		9515	9144	8679

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 1900 年総選挙の保守党 I は Bemrose、保守党 II は Drage 候補を指す。1906 年総選挙の保守党 I は Holford、保守党 II は Spencer-Churchill 候補を指す。1910 年 1 月総選挙の保守党 I は Beck、保守党 II は Page 候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。
5. 自由／労働は、自由党と労働党候補の組み票の数を表す。

％、労働党票の 94.9％ が両党の組み票であった。つまりこの選挙区では、ほぼ 9 割が一貫して自由党候補と労働党候補にペアで投票し続けていた。

では保守党が候補を一人に絞り込み、自由党、労働党が一人ずつ議席に挑戦し、さらに諸派候補が介入した 1918 年総選挙ではどのような変化が起きたのか。1918 年総選挙での 2 票制の票の行方を見ると、労働党候補に投じられた票のうち単独票は、27.8％ で、46.8％ が非連立派自由党候補との組み票であった。組み票の割合は過去の選挙に比べて目立って低下している。しかし労働党候補は、非連立派自由党候補との組み票のおかげで、他の候補を引き離して一位に躍り出て、議席を獲得するのに成功した。これから判断する限り、ダービー選挙区の場合、エドワード時代以来の労働党と自由党の支持者の結束は、第一次大戦後もある程度一比率でみればおよそ半分程度はなお機能しており、それが労働党候補を議席へと導いたと考えられる。

一方非連立派自由党候補に投じられた票は、87.9％ が労働党候補との組み票だったのに対し、非連立派自由党の単独票はわずかに 796 票、非連立派自由党に投じられた票の 5.9％ にとどまった。労働党に投じられた票の中で、

表 8 1918 年総選挙ダービー選挙区における二票制の分析

	単独	保守党との 組み票	自由党との 組み票	労働党との 組み票	諸派との 組み票	
保守党	4815 (32.3)		2456 (16.5)	477 (3.2)	7172 (48.1)	14920 (100)
自由党	796 (5.9)	477 (3.6)		11780 (87.9)	355 (2.6)	13408 (100)
労働党	6986 (27.8)	2456 (9.8)	11780 (46.8)		3923 (15.6)	25145 (100)
諸派	1562 (12.0)	7172 (55.1)	3923 (30.1)	355 (2.7)		13012 (100)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を％で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

自由党候補にも票を投じた有権者は、先にみたように労働党の票の 46.8% であったが、自由党の票の中での比重は 87.9% に達する。このことは、非連立派の自由党のコアとなる支持層が労働党に比べてもはるかに小さく、急速に縮小しており、その結果非連立派の自由党候補は、労働党の支持者との組み票に全く依存せざるを得ない状態に追い込まれていたことを物語っている。しかし労働党の支持層も、およそ半分しか非連立派自由党には票を投じなくなっていたため、非連立派自由党は議席を逃したのであった。

残念ながら 1922 年総選挙についてはダービー選挙区の 2 票制の票の行方については詳細な記録が残っていない。表 9 にみるように、労働党候補 2 人と自由党候補、保守党の候補が争った 1922 年選挙では、労働党と自由党の候補が議席を獲得した。労働党の候補は、1918 年総選挙と同じトマス (J. H. Thomas) であり、1918 年総選挙の時と同じく、自由党の支持者からも一定の票を集めたであろうと思われる。だが自由党の候補者は新人のロバーツ (C. H. Rpberts) に変わっており、1 位と 4 位の候補の票差は 3000 票を切る接戦で、全体の結果からは、自由党と労働党の組み票の行方を推し測ることは難しい。

しかし翌年の 1923 年総選挙については、2 票制の票の行方についての記録が残っている。参考のためそれを分析してみよう。労働党の候補者は、1922 年と 1923 年はいずれも、トマスとレインズ (W. R. Raynes) であった。

表 9 ダービー選挙区の党派別得票数
1922 年総選挙

	保守党	自由党	労働党 I	労働党 II
1922	22240	24068	25215	21677

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 労働党 I は J. H. Thomas、労働党 II は W. R. Raynes 候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。

表 10 1923 年総選挙ダービー選挙区における二票制の分析

	単独	保守党との 組み票	自由党との 組み票	労働党Ⅰ との組み票	労働党Ⅱ との組み票	無所属との 組み票	計
保守党	12033 (60.0)		904 (4.5)	721 (3.6)	147 (0.7)	6265 (31.2)	20070 (100)
自由党	3844 (36.0)	904 (8.5)		3463 (32.5)	378 (3.5)	2080 (19.5)	10669 (100)
労働党Ⅰ	594 (2.4)	721 (2.9)	3463 (13.9)		19484 (78.3)	625 (2.5)	24887 (100)
労働党Ⅱ	184 (0.9)	147 (0.7)	378 (1.9)	19484 (95.9)		125 (0.6)	20318 (100)
無所属	677 (6.9)	6265 (64.1)	2080 (21.3)	625 (6.4)	125 (1.3)		9772 (100)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 労働党Ⅰは J. H. Thomas、労働党Ⅱは W. R. Raynes 候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。

だが表 10 からみてとれるように、レインズの票のうち、95.9% が労働党トマスとの組み票であったのに対し、トマスは、この労働党候補との組み票に加えて、自由党との組み票も 3463 票（13.9%）集めていた。自由党と労働党の同盟関係はかろうじて残っていたものの、往時からみれば極めて弱いものになっていたと考えられる。一方自由党候補者の側は、単独票が 36.0%、労働党のトマスとの組み票が 32.5% だったが、獲得した票数は、労働党のいずれの候補と比べてもほぼ半分に満たなかった。自由党と労働党の支持者の中には、依然両者の結束を望むものもいたが、自由党の党勢はさらに衰え、労働党の支持者の自由党からのかい離も急速に進んだことを伺わせる。

最後に 1918 年総選挙では無投票で労働党候補が当選したボルトン選挙区

の戦況をみてみよう。ボルトン選挙区も、1906 年総選挙以来、自由党と労働党の候補が票を分け合い、保守陣営と対抗してきた選挙区であった。表 11 に掲出した得票数から計算すると、1906 年総選挙における自由党候補の得票の内、労働党候補との組み票は、すでに 71.5%、労働党候補の得票の内、自由党候補との組み票は、75.2% に達していた。1910 年 1 月総選挙では、この比率はそれぞれ 91.6% と 94.8% に、1910 年 12 月には 89.6% と 91.8% に上昇している。両選挙では、両党に投票したうちほぼ 9 割の人々が、労働党と自由党の候補にペアで投票したのである。1918 年総選挙は無投票となって、連立派自由党と労働党が議席を分け合った。しかしそれまでの票差をみると、1918 年総選挙では、保守党が、勝ち目が乏しいと判断して、候補の擁立を見送ったと考えるのが妥当であろう。

しかし 1922 年の総選挙では、一転、自由党、国民自由党がそれぞれ候補をたて、これに労働党の 2 候補と保守党の候補が加わり、5 人の争いとなった。1922 年総選挙の二票制の行方を掲出したのが表 11 である。ここから分かるように、労働党の候補と自由党、国民自由党との組み票は、ごく限られている。自由党に投じられた票の内、労働党候補との組み票は、10.4% と 9.1%、国民自由党に投じられた票の内の労働党候補との組み票はわずかに 1.4% と 1.0% に過ぎない。労働党候補に投じられた内の自由党候補との組み票も、9.4% と 8.4%、国民自由党との組み票は、2.1% と 1.5% にとどまった。労働党と自由党との協力関係は、ここではおおよそ消滅してしまったと言うべきであろう。

一方国民自由党と保守党との組み票は、国民自由党に投じられた票の内 79.5% に及んでおり、保守党に投じられた票の内では 65.7% に達しており、国民自由党と保守党支持者の半ば以上が、両者をペアとして票を投じるようになっていたことが示されている。一方自由党と国民自由党との組み票は、自由党に投じられた票の内 18.9%、国民自由党に投じられた票の内 11.3% しか占めておらず、自由党と国民自由党の支持者は、ほとんど別のグループになりつつあったことが分かる。

表 11 ボルトン選挙区の党派別得票数
1900 年—1910 年 12 月総選挙

	保守党 I	保守党 II	自由党	労働党	自由／労働
1906	6693		10953	10416	7828
1910. 01	7479	7326	12275	11864	11244
1910. 12	7870		10358	10108	9282

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 1910 年 1 月総選挙の保守党 I は Mattinson、保守党 II は Ashworth 候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。
5. 自由／労働は、自由党と労働党候補の組み票の数を表す。

表 12 1922 年総選挙ボルトン選挙区における二票制の分析

	単独	保守党との 組み票	自由党との 組み票	国民自由党 との組み票	労働党 I との組み票	労働党 II との組み票	計
保守党	8460 (22.6)		3107 (8.3)	24644 (65.7)	662 (1.8)	618 (1.6)	37491 (100)
自由党	8312 (44.8)	3107 (16.8)		3501 (18.9)	1925 (10.4)	1689 (9.1)	18534 (100)
国民自由	2124 (6.8)	24644 (79.5)	3501 (11.3)		441 (1.4)	305 (1.0)	31015 (100)
労働党 I	240 (1.2)	662 (3.2)	1925 (9.4)	441 (2.1)		17291 (84.1)	20559 (100)
労働党 II	253 (1.3)	618 (3.1)	1689 (8.4)	305 (1.5)	17291 (85.8)		20156 (100)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 労働党 I は Lomax、労働党 II は Abraham 候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。

一方、労働党候補との保守党候補との組み票も、労働党候補に投じられた票の内、3.2%、3.1% を占めているだけであり、保守党候補と労働党候補との組み票も 1.8% と 1.6% に過ぎない。こうした分布からわかることは、保守党と国民自由党の支持者が一つのまとまりをみせ、労働党がこれに対抗するグループとなっているのに対して、自由党は両者のはざまにあって孤立しつつあったということである。

6

労働党が 1918 年総選挙で議席を制した 4 つの二人区は、政党の対決の構図がそれぞれ違い、戦況も異なる。したがって単純な一般化は慎まなければならない。しかしプレストンの場合、1918 年総選挙における労働党候補と非連立派自由党候補との得票は、明らかにそれまでの労働党と自由党の同盟関係を継承したものであった。ダンディーの場合も、チャーチルは連立派自由党の候補であったが、その得票は、やはり従来労働党と自由党の同盟関係を継承したものであった。ダービーの場合には、労働党に投票した有権者は、およそ半分しか非連立派自由党候補に投票しなかった。このため、自由党は議席を逸したが、非連立派自由党候補に票を投じた有権者の 9 割弱は労働党候補に票を投じ、これを梃に労働党は議席を得た。ボルトンでも、1906 年以來自由党と労働党で議席を分け合ってきた勢いの前で、1918 年に保守党は不戦敗に甘んじた。こうしてここで取り上げた二人区に関する限り、1918 年総選挙で労働党は、第一次大戦前の自由党との同盟関係を継承することによって議席を確保したことが改めて確認できる。

しかし 1920 年代には、自由党と労働党の同盟の遺産は、急速に雲散霧消してゆく。プレストンの場合、1922 年にはまだ同盟関係はある程度機能していたものの、1924 年、1929 年と次第に支持層の結束は低下していった。ダンディーでは、1922 年の総選挙で、労働党に票を投じた人の内、自由党や国民自由党との組み票の比率は早くも 1 桁台の前半に落ち込んでしまっ

た。ダービーでも、1923 年総選挙では、労働党に票を投じたものの内、自由党に組み票を投じたのは、13.9% と 1.9% だけで、ボルトンでも 1922 年総選挙では、9.4% と 8.4% に過ぎなかった。

こうした結果から推定できることは、1918 年総選挙で、二人区においては、労働党は、独自の基盤を構築していたというよりも、かつての自由党との同盟関係を継承することによってその地歩を固めた。しかし 1920 年代を通じて、自由党の支持層は急速に細ってゆき、労働党が堅固な基盤を打ち固めていったのであった。二人区、一人区におけるこの過程をつぶさに検討することが、次の課題となる。

1918 年総選挙でチャーチルは、ダンディー選挙区でトップ当選を飾った。しかし 1922 年の選挙戦では一敗地にまみれて野に下った。選挙戦の最中に盲腸をとったチャーチルは「役職も、議席も、党も、盲腸もなく」ダンディーを去った。2 年の浪人生活を経て 1924 年によくエッピング (Epping) 選挙区から下院に戻った時、チャーチルは保守党に入り直し、大蔵大臣を務めることになる。二人の自由党の偉大な首相—アスキスとロイド・ジョージに仕えたチャーチルにも、もはや自由党に戻る選択肢はなかった。チャーチルにとっては、労働党との対決が、第一の課題となっていたからであった。だが自由党政権で社会改革の先頭に立っていたチャーチルのこの遍歴は、同時に選挙区のレベルでの自由党と労働党の革新主義同盟の変遷と崩壊を映し出していたのであった⁶。

注

- 1 本稿では、イングランド、スコットランド、ウエールズの選挙区を対象としており、アイルランドや大学選挙区は、分析の対象から除外している。なお本稿は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての自由党の再生と衰退、労働党の勃興の選挙基盤を分析する筆者の一連の研究の一環であり、第一次大戦までの選挙については以下の論稿を参照されたい。「近代イギリス選挙史研究序説—第三次選挙法改正後のイギリスの政治変動」(『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国語大学、1997 年所収)、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換—1886 年総選挙に

における自由党の分裂」(『グローバルヒストリーの構築と歴史記述の射程』、大阪外国語大学、1998 年所収)、「19 世紀末における自由党の衰退」(『国際社会への多元的アプローチ』、大阪外国語大学、2001 年所収)、「自由党の衰退と反攻－19 世紀末イギリス総選挙と補欠選挙－」(『英米研究』、大阪外国語大学英米学会、2004 年所収)、「1906 年総選挙と自由党の再生－20 世紀初頭の補欠選挙と 1906 年総選挙における対決の構図－」(『英米研究』第 30 号、大阪外国語大学英米学会、2006 年所収)、「1906 年総選挙における自由党の再生と労働党－二人区の得票分析－」(『英米研究』第 31 号、大阪外国語大学英米学会、2007 年所収)、「1906 年総選挙における自由党の選挙基盤－一人区の得票分析」(『英米研究』第 32 号、大阪大学英米学会、2008 年所収)、「自由党政権下の補欠選挙－続びる自由党の基盤 1906 年～1909 年－」(『英米研究』第 33 号、大阪大学英米学会、2009 年所収)、「20 世紀初頭自由党政権下の社会政策と選挙政治－1906 年～1910 年 1 月－」(杉田編『日米の社会保障とその背景』、大学教育出版、2010 年所収)、「危機の時代の自由党－補欠選挙 1911 年～1914 年」(『英米研究』第 35 号、大阪大学英米学会、2011 年所収)。「憲政危機と勝利の陥穽－1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙－」(『英米研究』第 36 号、大阪大学英米学会、2012 年所収)、「投票率と 1910 年総選挙」(『英米研究』第 37 号、大阪大学英米学会、2013 年所収)、「第一次大戦下の補欠選挙 1915～1918－総力戦の衝撃－」(『英米研究』第 38 号、大阪大学英米学会、2014 年所収)、「第一次大戦下のサルフォード北補欠選挙と自由党の衰退」(『英米研究』第 39 号、大阪大学英米学会、2015 年所収)、「1918 年総選挙と自由党・労働党－一人区における政党の対決の構図」(『英米研究』第 40 号、大阪大学英米学会、2016 年所収)、「1918 年総選挙と自由党・労働党－二人区における政党の対決の構図」(『英米研究』第 41 号、大阪大学英米学会、2017 年所収) 参照。

- 2 拙稿「1918 年総選挙と自由党・労働党－二人区における政党の対決の構図」前掲参照。
- 3 1918 年総選挙で労働党の獲得した得票が膨れ上がったことに着目し、これを画期的な飛躍とみる見解がある一方、労働党の議席像が比較的小幅なものに留まったことから、労働党の前進は限られたものだったとする見方がある。しかし巨視的に見れば、1918 年総選挙を画期として、自由党は、以後二度と政権を奪還することができなかった。自由党と労働党の同盟関係を重要な基盤としたエドワード時代の二大政党政治の仕組みは、この総選挙を境に終焉した。イギリスの政治は、移行期を経て、保守党と労働党の対抗を基軸とする新たな二大政党の時代へと変遷を遂げる。政治システムの変化という観点から見れば、1918 年総選挙で

の労働党の前進は、議席数の上で限定されたものであったとしても、やはり重要な分水嶺をなすと言わねばならないであろう。もちろん新たな生命がすべてそうであるように、この新たな政治も極めて不安定であった。歴史を引き戻そうとする力も働き、新たな枠組みは夭折してしまう可能性も孕んでいた。だがそのことは、新しい局面が誕生したこと自体を否定するものではない。

- 4 拙稿「1918 年総選挙と自由党・労働党－二人区における政党の対決の構図」前掲参照。
- 5 1918 年総選挙における二票制の票の行方についての分析は、拙稿「1918 年総選挙と自由党・労働党－二人区における政党の対決の構図」前掲から再録。本稿は、20 世紀初頭の選挙結果との比較で前項の叙述を補うためのものであり、紙幅の制限もあって、注記を最小限にとどめていることをお断りしたい。
- 6 ロイド・ジョージ派の自由党のチャーチルの同僚は、1922 年の落選でチャーチルが「彼の世界は終わった」と考えていた、と記している。チャーチルがその一員であったエドワード時代の革新主義的自由主義の世界は、確かに 1920 年代にその幕を降ろしたのであった。Martin Gilbert, *Churchill A Life* (Minerva, London, 1991) p.457.